

CAF賞 2021 入選作品展覧会

Contemporary Art Foundation Award 2021

「CAF賞」は、学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興を目的に開催し、日本全国の高校・大学・大学院・専門学校の学生、および日本国籍を有し海外の教育機関に在籍する学生の作品を対象としたアートアワードで、今年で8回目を迎えます。

この度、「CAF賞2021入選作品展覧会」を、11月24日(水)～11月28日(日)の5日間、東京・代官山のヒルサイドフォーラムにて開催いたしました。

公益財団法人 現代芸術振興財団

- 現代芸術振興財団について

公益財団法人現代芸術振興財団は2012年に設立されました。より多くの人が文化芸術に触れ、豊かで創造性のある暮らしを営むことに貢献したいという願いのもとに設立され、展覧会事業を通して人々が現代アートに親しむことのできる環境をつくること、表彰事業を通して未来へ文化をつなぐアーティストの活躍の機会を増やすことを目的に活動をしています。

- 設立者・前澤友作について

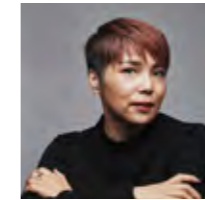
1975年千葉県生まれ。早稲田実業学校卒業後、バンド活動の一環で渡米。帰国後、1998年に輸入CD・レコードのカタログ販売を手がける有限会社スタート・トゥデイを立ち上げ、2004年、ファッションを中心としたインターネットショッピングサイト「ZOZOTOWN(ゾゾタウン)」を開設。2012年、2月に東証一部上場(3092)。同年11月に現代芸術振興財団を設立、現代芸術を中心としたアートコレクターであるとともに、若手アーティストの支援に力を注いでいます。

- 審査員



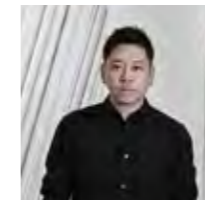
岩淵 貞哉 | 美術手帖総編集長／美術出版社取締役 |

1975年、横浜市生まれ。1999年慶応義塾大学経済学部卒業。2008年に「美術手帖」編集長となり、2019年より現職。2019年に「OIL by 美術手帖」として、アートECサイトとリアル店舗(渋谷パルコ2階)をオープン。公募展の審査員やトークイベントの出演など、幅広い場面でアートシーンに関わる。



金澤 韻 | 現代美術キュレーター |

1973年、神奈川県生まれ。現代美術キュレーター。東京藝術大学大学院、英国 Royal College of Art(RCA)修了。熊本市現代美術館など公立館での12年にわたる勤務ののち、2013年に独立。国内外で展覧会企画多数。近年企画・参画した主な展覧会に、ヨコハマ・パトリエンナーレ2020(横浜)、「インター+プレイ」、「AKI INOMATA:シグニフィカント・アザネス」、「ウソから出た、まこと」、「毛利悠子:ただし抵抗はあるものとする」、「ラファエル・ローゼンダール:ジェネロシティ 寛容さの美学」(十和田市現代美術館、青森、2018～2020)、杭州繊維芸術三年展(浙江美術館ほか、杭州、2019)、「Enfance」(パレ・ド・トーキョー、パリ、2018)、茨城県北芸術祭(茨城県6市町、2016)など。



名和 晃平 | 彫刻家／Sandwich Inc. 代表／京都芸術大学教授 |

1975年生まれ。京都を拠点に活動。2003年京都市立芸術大学大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。2009年、京都に創作のためのプラットフォーム「Sandwich」を立ち上げる。独自の「PixCell」という概念を軸に、様々な素材とテクノロジーを駆使し、彫刻の新たな可能性を拓いている。近年は建築や舞台のプロジェクトにも取り組み、空間とアートを同時に生み出している。2018年、フランス・ルーヴル美術館にて彫刻作品「Throne」を特別展示。2015年以降、ベルギーの振付家／ダンサーのダミアン・ジャレとの協働によるパフォーマンス作品「VESSEL」を国内外で公演中。

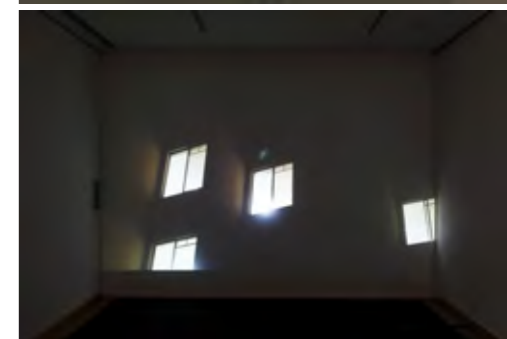


Photo by Keizo Kioku

保坂 健二郎 | 滋賀県立美術館ディレクター(館長) |

1976年生まれ。慶応義塾大学大学院修士課程修了。2000年から2020年まで東京国立近代美術館に勤務。同館にて企画した主な展覧会に「エモーショナル・ドローイング」(2008)、「フランス・ペーコン展」(2013)、「声ノマ 全身詩人、吉増剛造展」(2016)、「日本の家 1945年以降の建築と暮らし」(2017)、「隈研吾展 新しい公共性をつくるためのネコの5原則」(2021)など。「Logical Emotion: Contemporary Art from Japan」(2014、ハウス・コンストラクティブ美術館他)など国外での企画も行う。2021年より現職。主な著作に「アール・ブリュットアート 日本」(監修、平凡社、2013)など。「すばる」の連載など、芸術についての寄稿多数。





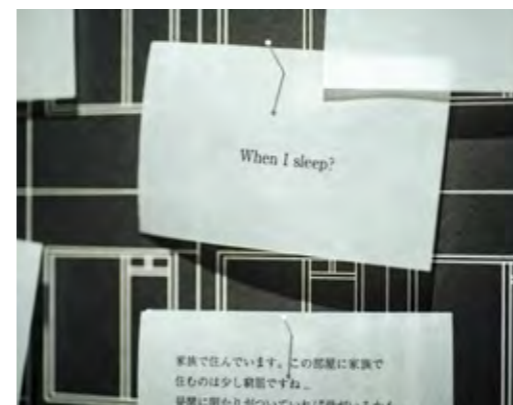
最優秀賞

稲田 和巳 Kazumi INADA
筑波大学大学院

住人たち
2019 アート・プロジェクト サイズ可変

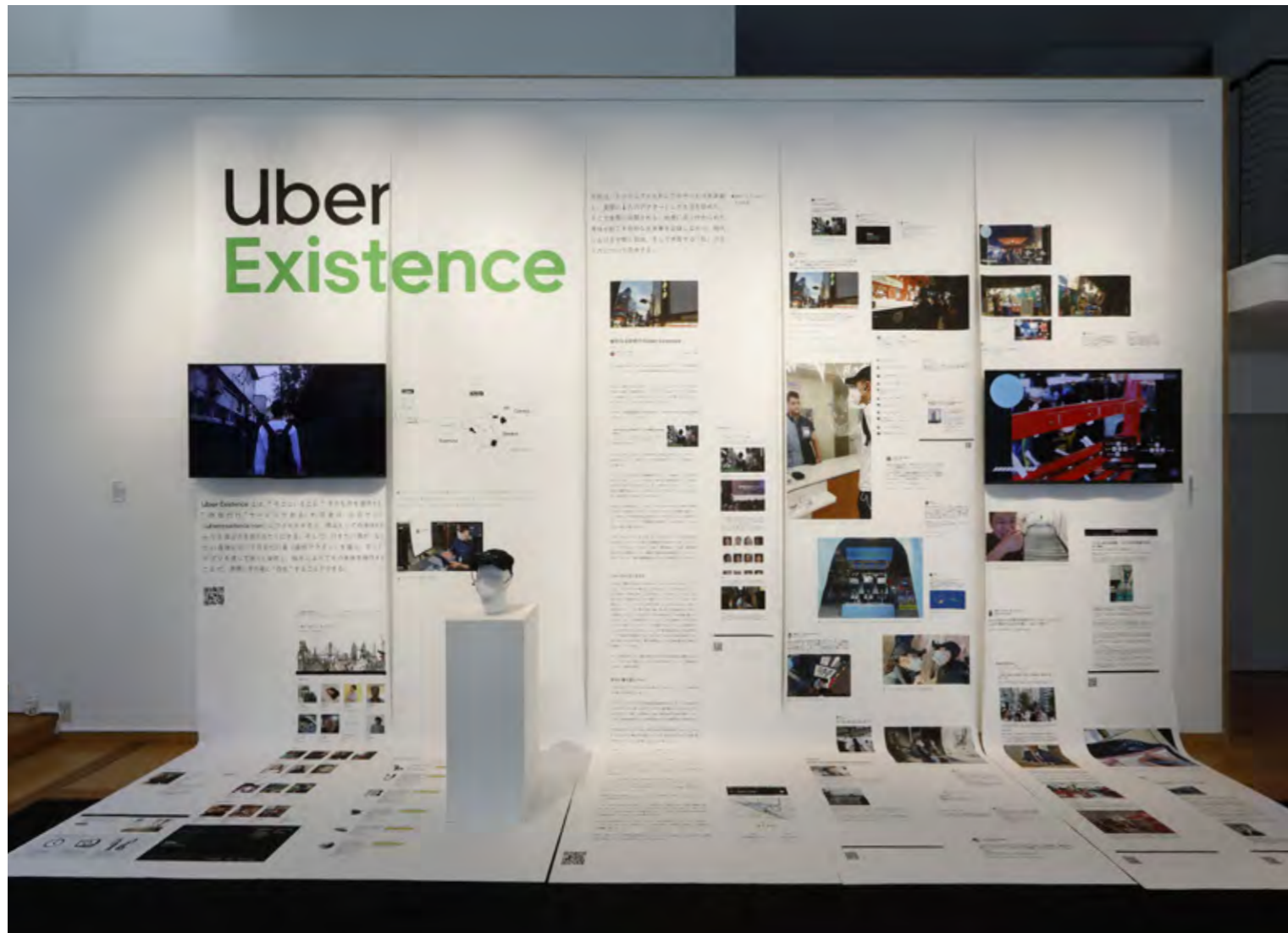


使われなくなった建物の窓に灯る明かりは、現実には生活する誰かの住処の明かりと繋がっている。人々が帰宅すると灯り、眠りにつくと消える明かりは、彼らの生活が重畳して成す社会のゆるやかな脈動を等身大に表す。計算機やセンサは、自らの身体や感覚では正確に視ることができない外界を測定し、複製し、観察することを可能にする。社会でうまく振る舞うことに生来の苦手を持つ私にとって、自己や自己が属する世界の俯瞰に取り組むことは、混沌としてみえる世界に秩序を見出して生きるための挑戦である。



審査員講評

本作は筑波の街中にある、筑波大学のかつての学生寮を使用し、人々が“住んだ”記録を反映し行われるアート・プロジェクト作品である。どこかに住んでいる人が家に帰ってきたときに灯した明かりに反応し、リアルタイムに電気がつくようになる。実際に本作に協力した人たちも、会ったことがない人も含め、協力者によって作られていくという匿名的な人々の何気ない生活の振る舞いが、この廃墟となってしまった、一見冷たくも見える学生寮に明かりを灯していく、そういったシステムを開発した。現在のコロナ禍において、部屋で一人孤独に過ごさなくてはならない状況が続いている中で、改めて人が暮らすということはどういうことなのか、今現在できることはなんなのか、また、明かりというものが人々の生活にとってどのような意味があるのか、そういった問いを説得力のある形で考えさせられる作品である。本賞の副賞として開催される、来年の彼の個展においてはどのようなプランを出してくるのかまだわからないが、彼が個人で、あるいは他の人とコラボレーションをすることで、新しい作品が生まれることを期待し、最優秀賞とした。(保坂)



岩淵貞哉審査員賞

花形 槇 Shin HANAGATA
多摩美術大学大学院

Uber Existence

2020-2021
身体・視聴覚機器・コンピュータ・ウェブサイト等
サイズ可変



Uber Existenceとは、そこにいることそのものを提供する、“存在代行”サービスである。利用者は、公式サイトにアクセスすると、商品としての身体がずらりと並ぶのを目の当たりにする。そして、行きたい場所、なりたい身体に応じて存在代行者(アクター)を選ぶ。そして、アプリを通じてアクターと接続し、指示によってその身体を操作することで、実際にその場に“存在”することができる。花形は、エンジニア・古田克海とともにこのサービスを実装し、実際に1人のアクターとして生活を始めた。そこで実際に体験される、他者に成り代わられた身体が起こす奇妙な出来事を記録しながら、現代における労働と自由、そして「私」の在り方について思考する。

審査員講評

実際にウェブサイトをつくり、架空のサービスを提供するパフォーマンス作品。自分が実際には存在しない場所でアクターに代行してもらい、体験してもらおう。本作内ではバーチャルとリアル、意識と身体境界が揺るがされる。メタバースが生まれ、コロナが蔓延する世の中で、リアルな体験とはなんなのか、自己の存在や自身の肉体とはどこにあるのか。自分の体験や記憶、人生の核にある根源的な問いを考えさせられる作品。ややもするとスキャンダラスな見え方をしている作品ではあるが、人間「存在」に対する深い問いかけがあると思った。(岩淵)





審査員講評

乾の作品はジェンダーにまつわる「もやもや」を母娘が語る。この、歴史として折り重なった、簡単には解けない問題に対して、態度をすぐに決めきれない逡巡や、あえて決めないというある種の《優しさ》のようなものが表れていて、そこから、この問題をまず抱き留めようとする誠実さが伝わってきた。作品として成立させるため、ドラッグクイーンを参照にしたというメイクや、衣装、小道具や演技、作品の最後に流れる作家自身が作詞作曲し歌う歌など、一つ一つの小さな要素を非常に丁寧に積み上げており、その構築的な表現に力強さを感じた。また、演技方や編集においてはどこかユーモラスな余白があり、それが鑑賞者を惹きつけた。問題意識の鋭さ、それを捉えるセンス、スキルが充分にあると思うので、今後はさらに《面白いもの》を作っていってほしいと思う。(金澤)

金澤韻審査員賞

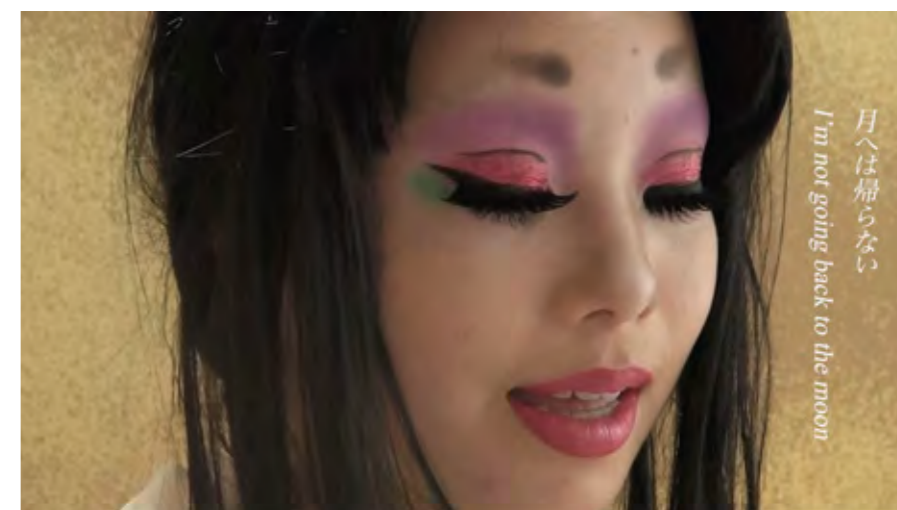
乾 真裕子 Mayuko INUI
東京藝術大学大学院

月へは帰らない
2020 映像 サイズ可変



Photo: 零

家父長制が色濃く残る家庭で育った母、かぐや姫、そして私の存在が交錯する映像作品。かぐや姫に扮した私と母のイメージとともに、ジェンダーに関する二人の会話を記録した。かぐや姫が月へは帰らずに自分らしく地球上で生きていくためにはどのような方法があったのか？三人の女性の生き方を通して考察した。



名和晃平審査員賞

羽田野 皓紳 Akinobu HADANO

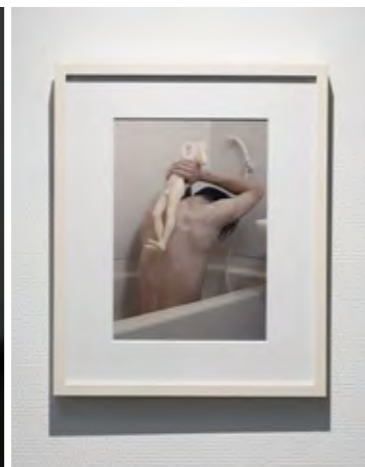
東京藝術大学大学院

Flowing Bodies

2021 映像、石鹸 サイズ可変

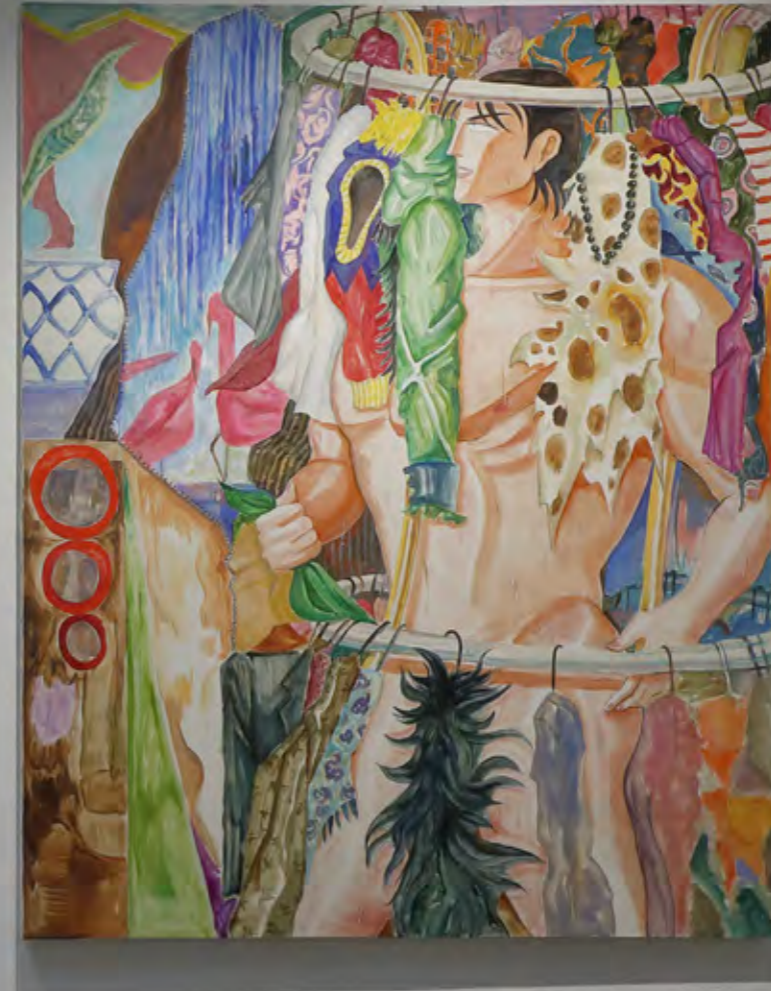
本作品は彫刻と映像の組み合わせからなる作品である。モデルとなった人物を3Dスキャンし、そのデータを元に精巧に作られた高さ60cmほどの石鹸を原材料から生成し彫刻を作った。その石鹸を使ってモデル自身の体を洗う様子を撮影した。

モデルが象られた石鹸の彫刻は使えば使うほど溶け、削れて無くなっていく。一方モデル自身は生き残るために体を洗い清潔になり肉体を残していく。消えて無くなっていく形象と、物質として残り続けようとする身体が交差する、その瞬間どんな飛躍が生まれるのかと企んだ。



審査員講評

羽田野は彫刻作品を作り続ける作家で、人体彫像の歴史に興味を持っている。本展では身近な人物を3Dスキャンし型取りを行い石鹸に置き換え、さらにお風呂でそれぞれの人物がその石鹸を使い体を洗うというシーンを映像化、写真化している。石鹸の彫刻で頭部だけの彫像と裸像とがあるが、それらはブロンクージ、ロダンの青銅時代の歴史的な彫刻のポーズを取っている。新しい技術とクラシックな彫刻、そしてその歴史を参照しながら彼の世代の表現を生み出そうとしているところに興味を持った。(名和)

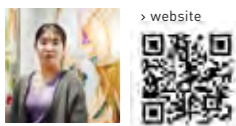


保坂健二郎審査員賞

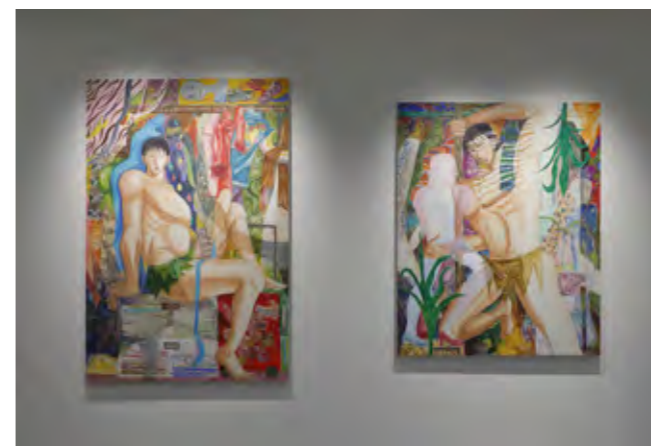
佐藤 菜々栄 Nanae SATO
多摩美術大学大学院

Jungle 1 - 4

2020-2021 キャンバスに油彩、鉛筆
(上下3点)162cm × 130.3cm
(下、左1点)194cm × 130.3cm



この絵にはクローゼットの中に身を潜める男性が登場する。半裸の肌にまとわり付く衣服の感触は、同じ素材でありながらも常日頃身に纏う衣服の感触とは全く異なり、どこか奇妙で神秘的なものがある。皮膚感覚が鋭敏になり、まるでクローゼットの中が既製のジャングルに変身したかのような感覚の中で、己の世界に浸っている男性のナルシズムをテーマに制作した。



審査員講評

本展には4枚の絵画が展示され、絵の中にはターザンの格好をした半裸の男性が描かれている。クローゼットにある洋服の中で洋服を探したり、身に着ける模様が描かれている。佐藤はそのシーンの触感や心情を想像し描かれており、一種のナルシズムを扱っている作品である。昨年作られた作品に比べると今年描かれたものは男性とは別に、別人格のように見える存在がいたり、植物が現れたり、ゴージャスな表現が薄塗りになっていたり様々なチャレンジが現れていて、そういった点も考慮し個人賞とした。(保坂)

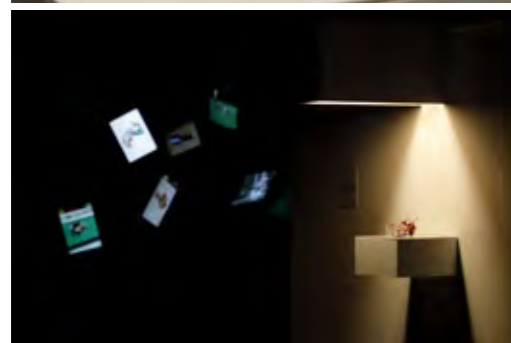
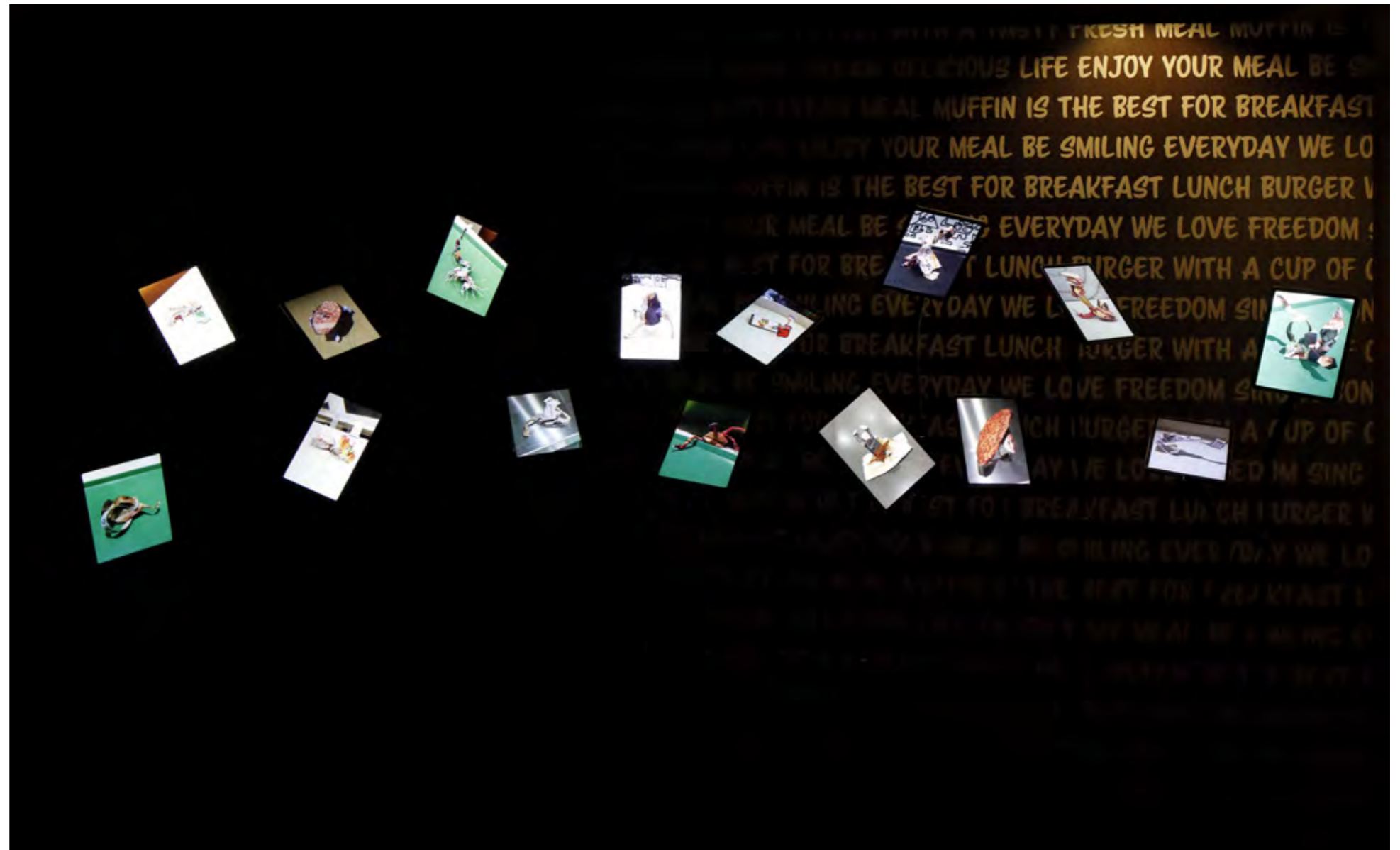
大里 淳 Jun OSATO

東京藝術大学大学院

order

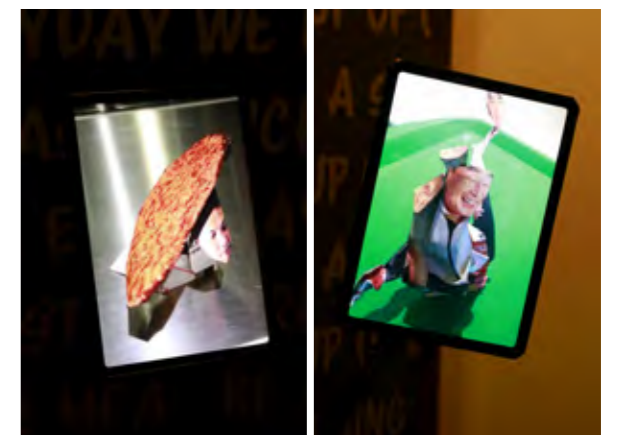
2020 映像 サイズ可変

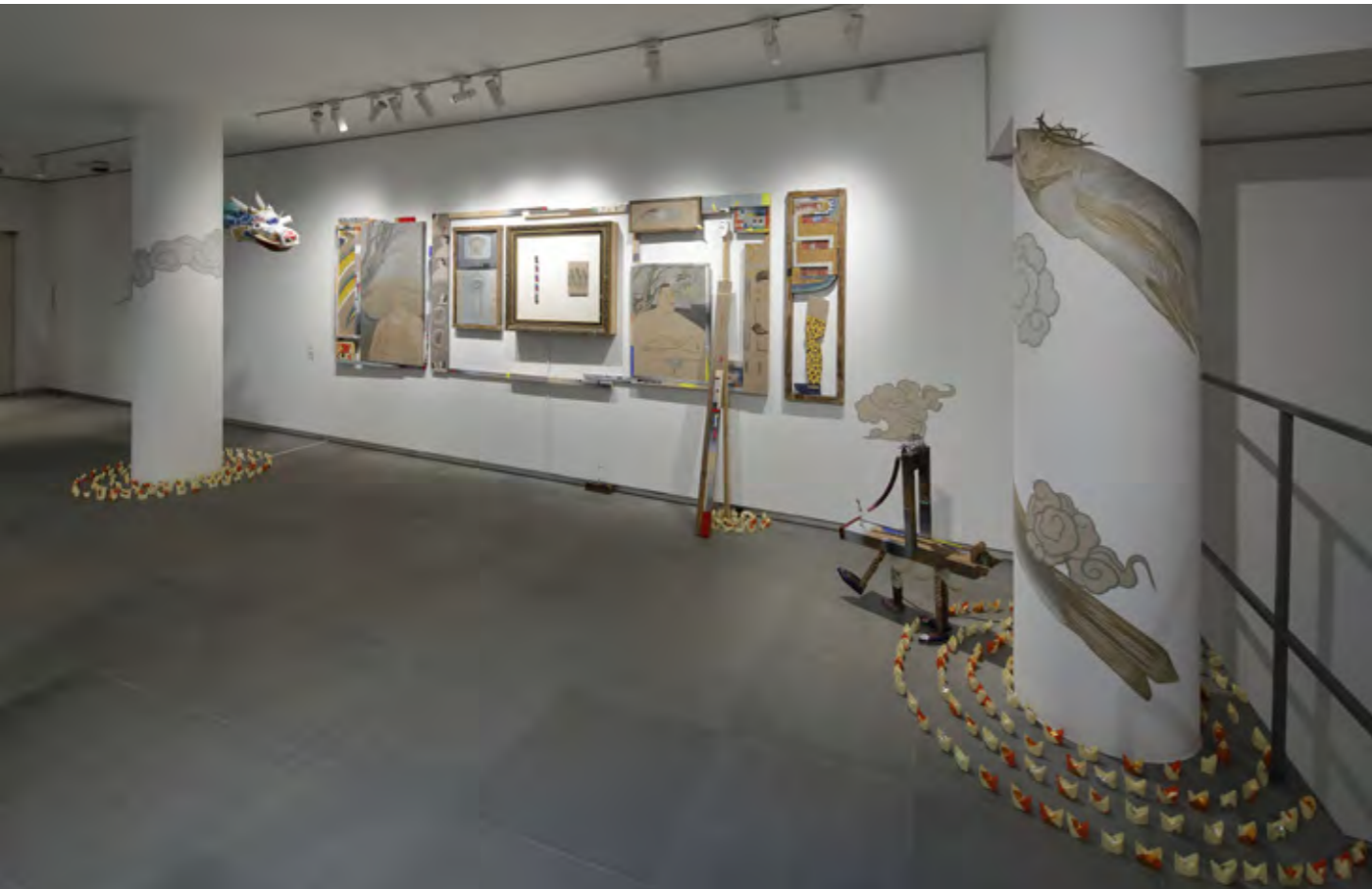
この作品はマルチチャンネルのビデオインスタレーション作品である。マクドナルドで商品を注文し、店内で食事をしたあと、席で即興で彫刻を制作・展示・撮影する。映像は展示の記録のようなものである。彫刻に使われている素材は、商品載せるトレイに敷かれているチラシである。制作においては、消費者であること、その同時代性を重視している。ほとんどの場合、消費のプロセスでは、自分で考え行動したと錯覚しながら似たり寄ったりの手続き化した行動しかとれない。それは私にとってはどんなときも逃れがたい現実である。



審査員講評

誰しもが行ったことがあるマクドナルドで、トレイの中に敷かれている広告紙を自分で折り曲げ、その場で彫刻、アートにしてしまうという作品である。実際に大里がマクドナルドに行き、食べ物を食べた後に生まれる作品で、その姿を想像し少し微笑ましいようなシーンを思い浮かべながら見ていたが、その誰もが受け取る広告紙を自分のオリジナルのアートに変えてしまう、日常に変化を与える、アートという遊びの要素を残していく。それが《東京》という大都市の中で、大里自身が作っているその時間を想像した時に、非常にユニークだと感じた。彼が海外のどの国かへ赴き、その地のマクドナルドでこの作品を作り続けるのかもしれない、そんなことを勝手に楽しみにしている。(名和)





工藤 時生 Tokio KUDO

武蔵野美術大学大学院

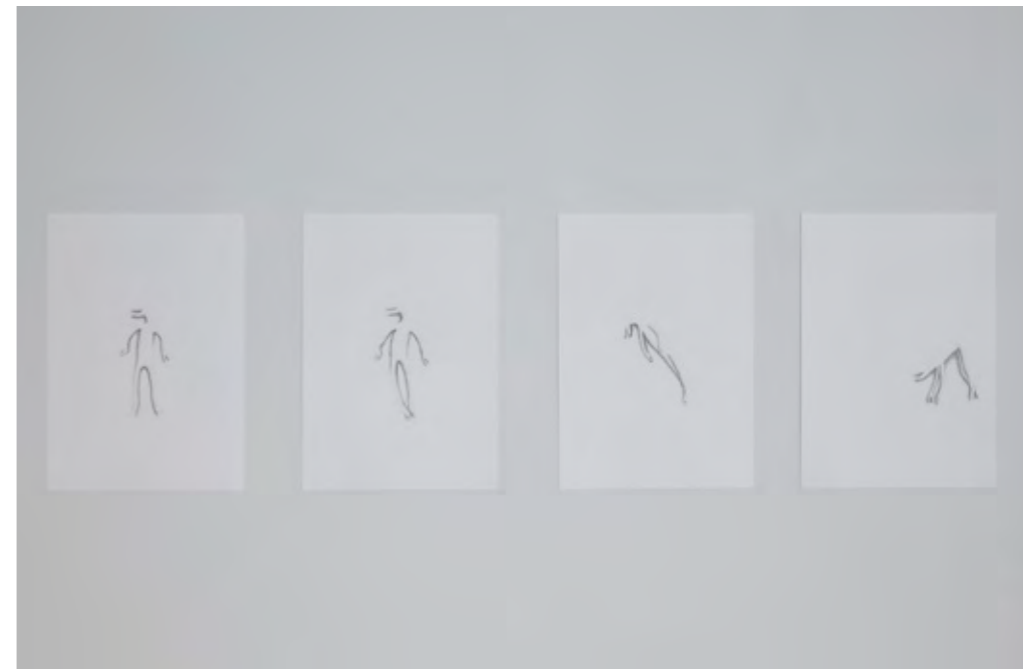
Untitled

2021 サイズ可変

『人とはどういう存在なのか』という根本性への問いである。近代的画一化による精神の頹廃、それに逆らうようなロマンチズムへの憧憬と渴望。相剋のなかで生み出される抒情的な誘惑や眩暈、そして艶やかさへの偏愛といった自律的遊戯を『セルフポートレート=生き写し』として出現させる。



> Instagram



オウ ギョウユウ WANG Xiaoyong

多摩美術大学大学院

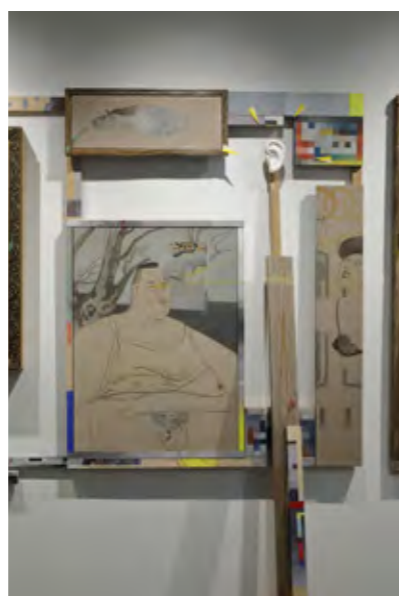
3メートル江山図

2021 ミクストメディア サイズ可変

インスタレーションと平面作品で構成された作品群で、「散点透視法」という中国古典山水画の概念を脱構築し、中国南地方のデサコタの風景を絵描く作品である。デサコタは、社会学者テレンス・ゲイリー・マギーが取り上げた地理概念で都市の周辺地域で、戸籍制度によって都市と農村は二元的な状態になっている中国の地理的隙間になっている。この作品はデサコタの記号を単語として、物語を語る作品でもある。



> Instagram



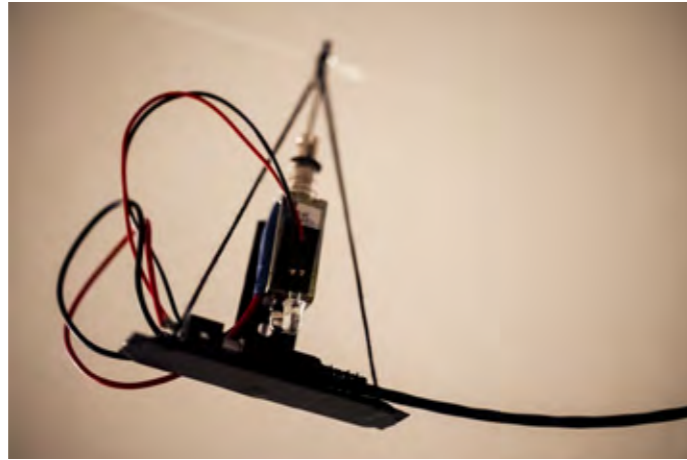
楽原 幹治 Kanji KUWAHARA

東京藝術大学大学院

Rhythm space #16

2021
ソレノイドユニット、ケーブル、金属片、糸、電子回路、Arduino、Max
サイズ可変

ソレノイドの打突による音とLEDの光を同時に発するユニットを、線を描くように配置する。自己生成的にプログラムされたタイムシーケンスにより順番に通電していくことで、空間内をイマジナリーな存在が動き回っているような感覚を鑑賞者に与える。映像メディアがもつ「イメージが運動する錯覚」という原理的性質から、本作は、芸術形式を問わず感じることできる「リズム」の概念を「質的なかたちを為す運動現象」として再定義する。



白川 真吏 Mari SHIRAKAWA

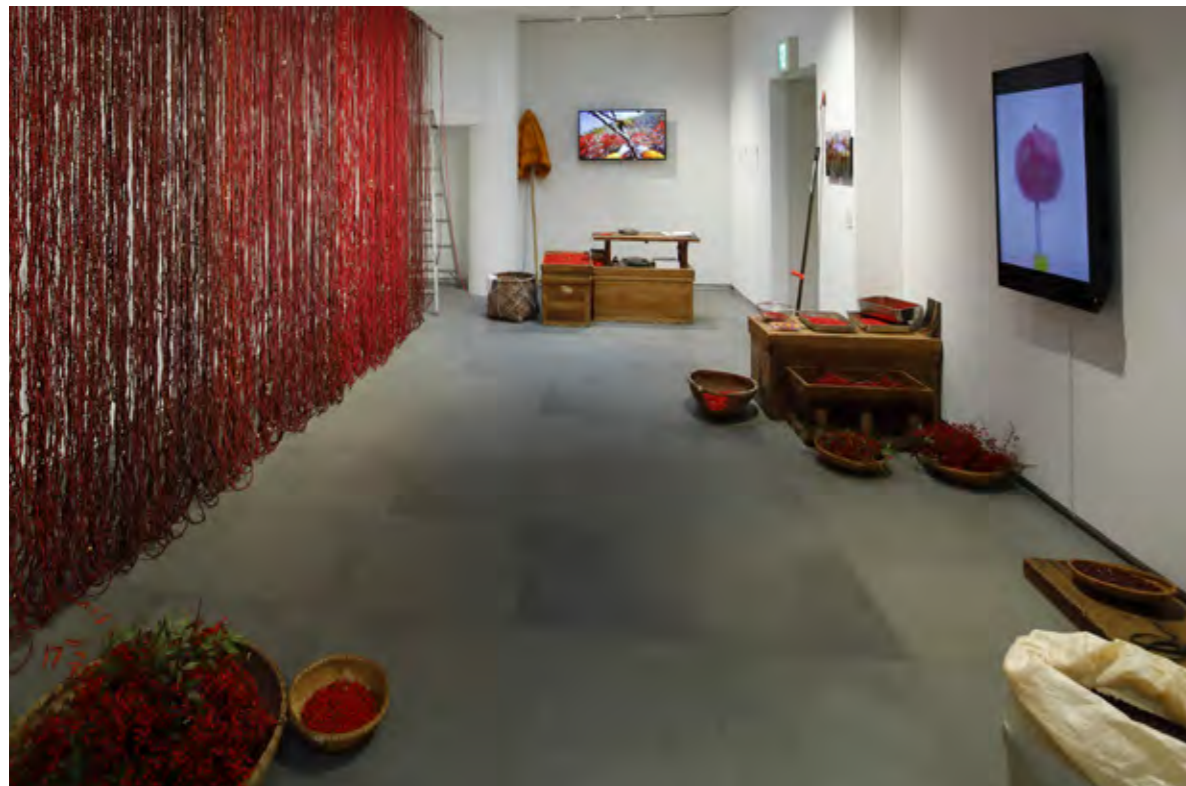
多摩美術大学

「架空」についての証明であり、他者からの干渉を許す為の装置

2021
キーボード、カーペット サイズ可変

本作は、作者の身体とキーボードを用いて「架空」と呼ばれる存在の証明をするパフォーマンス作品である。鑑賞者はキーボード(装置)を介して、作者に内在する実体のない「架空」の存在に干渉することができる。

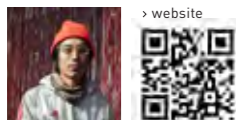




藤生 恭平 Kyohei FUJIO
東京藝術大学大学院

風景のための部分的全体
(南天 1836M)2021

2021
南天の実、真鍮線、竹、映像、
インクジェットプリント、その他
サイズ可変



実家の裏山に、どういふ訳か大量に自生／増殖する南天を摘み取って、バラバラにし、数珠つなぎにする作業を繰り返している。今年で7年目となり、南天の実の連なりは1836メートルを超えている。その作業工程では、ひとつずつの南天の実を見つめることが強いられ、何らかの要因により生じた異形や障害、傷など、それぞれの実が持つ質感や情報に気づくこととなった。毎冬真っ赤に染まる南天畑の風景があり、その中に限りなく小さく存在する南天の実にも風景がある。そして、これら一連の作業を通して、私もまた風景の中の部分的全体であることを確認することができる。本作品は、数珠繋ぎとなった南天の実1836メートルのインスタレーション作品と、南天を収穫／解体する過程を記録した映像(南天の収穫と解体)と、解体された実(異形・障害・傷がある)を接写撮影した写真群のライド映像(部分的全体について(南天))と、南天畑で撮影したセルフポートレートの写真作品の4つの要素で展開する。



GILLOCHINDOX ☆ GILLOCHINDAE

多摩美術大学

@[B1Δ ©61] 獣@ணπ]OFFic三街↑912133群=
F三:φ:ΣΠ》♫—————GuΠe♀

2021

パネル、和紙、岩絵具、墨、アルミ複合版、ミクストメディア サイズ可変
(右下写真内3点左)Episode.0 "JYU" - crosswhen - Exhibition Box DM
デザイン:八木 幣二郎、銃弾制作:高橋 銃、外箱制作:篠原紙工
(右下写真内3点中央)STATEMENT STONE PLATE
デザイン:八木 幣二郎、印刷ディレクション:加藤 昌美、印刷アシスタント:我
(SoundCloud)JYU_0
サウンド:張



> Instagram



> SoundCloud



本作品は「獣(第0章 / 交叉時点)」のメインピースであり、通称ギロチンと呼ばれる。獣とは全7章からなる物語で、毎年1章ずつ展示とライブイベント形式で展開する長編プロジェクトだ。今回の第0章は全編の時間軸上で中間地点[交叉時点]に位置する。ギロチンでは主役の黒い獣が狩人に狙撃される、第0章のシーンをインスタレーションで展開した。鉄パイプと金属板は漫画の枠線やコマ割的な表現するために使用。パネル周辺のモチーフ達は今後に続く伏線で、鉄パイプによって各々の関係性を物理的位置関係によって示した。



CAF AWARD 2021

Review

November 23, 2021



CAF賞2021審査を終えて

—— 最終審査、大変お疲れ様でした。入選作家みなさまの作品について、簡単にコメントいただけたら嬉しいです。

保坂 そうですね、せっかくなので一作品ずつ見ていきましょうか。みなさんどうでしたか。

名和 今年は全体的に、仮想とか架空といったテーマが多かった印象ですね。

岩淵 唯一映像作品だけの出展だった乾さん(P.8)は、作品のコンセプトがしっかりした完成度の高い作品でした。

名和 乾さんの作品は台詞で説明する部分が多すぎたように思いました。台詞ではなく、映像言語を通じて伝わるともっと良かったかなと。

保坂 作中で言われている、いわゆる家父長制については、結構いろいろなところですでに言及されている問題ではあるので、真新しい視点というわけではなかったり、そこが気になっています。それから映像の最後に流れる、乾さんが作詞作曲したかぐや姫の歌は、映画の歌にあり方が似ているというか、非常に印象的ではあるけれど、構図も映画的で乗っかってしまっているように思いました。乾さんは考えていることは面白いと思うけれど、映像作品としてはまだ作り出したばかりなのかなと。

金澤 荒削りに見えるかもしれませんが、学生のレベルで衣装とか、シナリオとか、作詞作曲するとか、ここまで準備して構築された作品ってなかなか見ることができないと思いました。家父長制、ジェンダーの問題については、いろいろな人が問題意識を持って作品にしてきた歴史がある中で、今でこそありふれているかもしれませんが、日本で生ま

審査員 美術手帖総編集長
岩淵 貞哉

×

現代美術キュレーター

金澤 韻

×

彫刻家

名和 晃平

×

滋賀県立美術館ディレクター
(館長)**保坂 健二郎**

れ育った女性からメッセージを発信するというのは、実はとても勇気がいることで言いづらいことだったりもします。彼女の作品はその問題意識を声高に叫ぶでなく、母娘の会話の中で穏やかに、呟くように忍ばせていて、それから鑑賞者の注意を惹きつけるための工夫が随所に凝らされていて、自然に共感を覚えさせられる。良い作品だと思いました。

岩淵 稲田さん(P.4)の作品は時空間のスケールが大きく、詩的な作品でした。

金澤 最終展示でライブ映像が加わって、すごく良くなりましたね。

名和 実際にこの寮をつくばまで見に行けたら面白いですよ。夜に行かなきゃいけないというのが難点ですが。

岩淵 実物を体験したらどんな感情が去来するのか。また、作品の中にあつた、住人のコメントはもう少ししっかり取ってもよかった。鑑賞者とは違う景色が見えていると思うので。

保坂 住人をつくばの人ではなく、世界の人に広げたときに、どんな意味になるのだろうかとか、時差があったりしたらどうなるのかみたいな、そういうアプローチを見たい気もします。この作品はつくばだから面白いというのはあるので、世界に置き換えて引き伸ばしてしまうとこの作品の形である必要がなくなってしまうのかもしれませんが。作品への落とし込み方がまだ手探りな感じがするので、他のアーティストやクリエイターなど、誰かとコラボして作ってみたら良いかもしれないですね。それから、稲田さんが説明の中でチラッと「俯瞰」という言葉を使っていましたが、俯瞰の視点にもっと重点を置いたら良いかもしれないです。この展示で発表していた中継映像も、建物にすごく寄っている場面が多く映し出されていたので、本当はもっと俯瞰して遠くから見たら面白かったかな。

名和 先日海外から帰国した後に自宅待機の期間があつた

んですが、その間位置情報をアプリで管理されていました。それに近い世界があ作品にはありました。GPSとアプリで自分が家にいることを証明し続けなくてはいけない、管理された世界というか、そういうものを作品から感じ取りました。**岩淵** オウさん(P.16)も非常にユニークな作品で印象に残りました。彼は中国出身で日本画を学びながらも、油絵や立体も取り混ぜていて、今後の展開も楽しみ。

名和 中国の人があの作品を見たらどう見えるのか気になります。絵のうまさと立体の可愛らしさのそのギャップがすごかったです。人物のデフォルメの仕方が面白くて、まさに中国にいそうなおじさんを描いているなど。

金澤 人物像には私は既視感を覚えました。ただ何より、オウさんの作品、上手に纏め過ぎているように感じました。

保坂 90年代の韓国では近代性や伝統性などの枠組みに囚われない作風の作家が一定数いたんですが、オウさんの作品は彼らの作風に近いものを感じました。それから、審査の時の説明も作品も、彼はとても楽しそうにやっていたのが印象的でした。動いている小さな作品に「これは何？」と聞いたら、「目を引きたい」と正直に答えていて(笑)、好感度が高かったです。彼が説明してくれたデサコタ(農村都市共同体として拡張した大都市圏)や、中国のある世代の人たちが持つ、批判的にも肯定的にも捉えられる光景を合体して作品にするという姿勢は面白いし、単純なまとめ方かもしれませんが、かつて日本の写真家たちが郊外を写真作品として切り取っていたように、中国版絵画作品とも言えるのかなと。

名和 そうですね。ただ、それが彼自身とどう関係しているのかというのが、作品や説明からよく見えなかった。生まれ故郷がどういう場所だったのかなど。もう少しコンテクトを知りたかったです。

金澤 私は白川さん(P.19)の作品に強烈な印象を受けました。何もない個室に、エンターキーしか押せないキーボードとパフォーマンス・白川さんご本人がいて、通常は5分ほど体験します。パフォーマンスを見た後に彼女が書いたテキストを読んだのですが、在・不在の話や想像の可能性について書かれており、コミュニケーションの可能性・不可能性の強いメッセージを感じました。正直、私がパフォーマンスを体験した時には、テキストに書いてあることまで感じる事ができなかったのですが、繋がる可能性への希望と、全く繋がっていない絶望が隣り合わせになって、心を動かされました。オノ・ヨーコの《カット・ピース》やマリーナ・アブラモヴィッチの《Rhythm 0》など歴史的な作品がリファレンスとして頭に浮かんできますが、彼らの作品から感じる強さとはまた違う強さを白川さんの作品から感じました。

保坂 かつてのパフォーマンス作品はパフォーマンス自身を触らせましたが、白川さんの作品では案内役の方に、「パフォーマンスには触らないでください」と言われました。今風だなと思いつつ、一方でそれをポジティブに捉えていのかは悩みました。触る・触らないの判断は観客に委ねても良いように思いましたが、もしかすると実際怖い思いをしたのかもしれない。

岩淵 鑑賞者のアクションに対して、パフォーマンス(作家)のなかでしか変化がおきておらず、鑑賞者からは確認できない、その特異なコミュニケーションの形態が良い緊張感を生んでいました。

名和 明るい部屋で見ることができたのが良かったです。個室ではなく、人がたくさんいるパブリックスペースでやるのも良さそうですね。ただ、テキストの中のキャラクターの説明が僕はよくわからなかったです。

金澤 そうですね、最後に渡されるテキストはつけなくて

も良かったかなと思いました。作品が矮小化されてしまったなと感じます。ただ作家にとっては必要なプロセスの一つだったのでしょうか。今後の展開に期待します。

保坂 僕は藤生さん(P.20)について少し話したいです。彼は展示に際して様々な道具を持ってきていて、この道具を使用しないと南天に虫が寄ってきてしまう、と説明していましたが、結局は、彼は古いものや民芸的なものが好きなのかなと感じました。勝手に解釈してしまえば南天の作品も、自分で今まで見たことがないタイプの民芸品を作っているような感覚なのかもしれないと。それを7年間もかけてやってきているわけで、すごく面白いなと。彼はいろいろな言葉をつけて説明をしていたけれど、おそらく本当はもっとシンプルな理由があるのではないかなと思いました。

岩淵 とてもユニークなことをしていて、何にも似てないのですが、あの作品をどう位置付けたり良いのかやや迷いました。コンテキストが見つげづらく、判断が難しいところでもありました。環境の問題や地域の歴史とか、そういったリサーチの作品かとも思いましたが、そうでもなく作家の衝動から駆動されている作品という印象です。不思議な迫力がありました。

名和 意味不明で面白いですね(笑)。7年作り続けているというのは相当好きじゃなければ続かないでしょうが、彼のモチベーションがどういふものなのか知りたかったです。それから、最後の形があったら良かったなと。南天を吊っているだけだと、「収穫しました」という見え方に収まってしまうので。

保坂 でも藤生さんは、吊って、その向こう側が見えて暖簾のようで良いと言っていました。僕は彼のその話を聞いて、もしかしたら作品というか、生活の道具を作っているのではないかという気がしました。あるいは、生活の中に見

える風景を、こういう生活感が排除された展示室の中に入りたいのかも、とか。民家の軒先に柿とか干してあるの、良い風景じゃないですか。柿はもたないけど、南天の実は少なくとも7年はずわいだから、自然物がたくさん垂れ下がっている風景をいかに持続的にするか、そういうことをしているのかなと思いました。

金澤 こういうタイプの作家、数は多くないですが、いつの時代にも現れ続けているように思います。以前お仕事で一緒した方で、河津紘さんという作家がいて、彼は長崎で盲学校の教員をしながら、目に見えない誰かの足跡を、路上で、手のひらで触って、天に向かって差し上げるという身体的行為を毎日ひっそりと続けていました。足跡を残した人が生きた証を、そっと大事にいただいて、天に返していく作業なんですとおっしゃっていました。それを聞いた時に、美術の制作というよりもなにかの修行のようだと感じて、ずっと心に残っています。藤生さんのこの作品も、生きるという行為に結びついた農作業のようでもあり、写経のような、長い時間をかけてやるパーソナルな儀式のようでもありますね。彼は「大きなものの一つでしかない《自分》を感じるための行為」と言っていました。独特の尊さを感じます。河津さんは観念芸術の松澤宥のお弟子さんだったので

すが、藤生さんもその方向から見たいのかもしれない。**保坂** 大里さん(P.14)は、偶然作り上げた作品に対して、後から意味を考え足しているという点が、むしろきちんとしているなと思いました。ちゃんと意味を捉えようとしていて、マクドナルドが持っている意味や、作品を作って置いていくこと・持っていくことの意味とか、最終的にマクドナルドがアトリエになっている意味など、後付けなんだけれど、しっかりしているなという印象でした。

名和 照屋勇賢さんの作品を思い起こさせますね。



保坂 照屋さんの紙袋の作品の場合は、眺めるととても綺麗である一方で、明確な資本主義批判みたいなものがありました。それから、マクドナルドを題材にした作品で言うと、高山明さんの作品もあります。高山さんの作品は、世界各地のマクドナルドで移民や難民の人たちに講義を行ってもらい、購入して聴講できると言ったものでした。大里さんの作品の場合はどちらかというユーモア寄り、造形力はあるし、作品の中に批判もあるのだろうけど、それがあまり見えないというのも良いことであるのかなと。日本のマクドナルドにはいろいろな階層の人がいて、そこに大里さん自身もいて、それでこの造形力たっぶりな作品が生まれていて、しかもベースはトレーに敷かれている広告紙と言うのが面白いです。言ってしまうと誰でもできることで、例えばマクドナルドでワークショップしようぜ、みたいなことも出来たりするんですね。簡単にできる作品で見せるというのも好感が持てました。

金澤 その場で作って、捨てるんですね。それが現代社会への批評にもなって、さらにしたたかな創造力の表明にもなって、よかった。展示からその、作っては消えていくというエフェメラルな面白さが今ひとつ伝わってこなかったところが残念でした。

保坂 僕は佐藤さん(P.12)も面白いと思いました。キッチンとゴージャスを合体させようとする努力、ゴージャスはキッチンよりなところはあるわけで、そのこと自体に気づかせてくれたわけですが、人体の造形のセオリーを無視して、やりたいようにやっていると言うのが面白いです。あの4枚の作品の中では、去年と今年と作られたものがありますが、去年作られたものより今年作られたものは一層進化していて好きでした。

名和 顔だけ変わったら良かったかも。服の描き方は絵画

的で、顔だけ漫画的…というのが、なんとも違和感がありました。

保坂 その点はもしかすると、我々の年代だけがアレルギーを起こしている可能性はあります(笑)。あの描き方が良いのではないかと思います。ただ一方で、漫画文化の流れから変な風に消費されてしまう危険性はあるので、そのリスクを彼女が負うつもりがあるのかはわかりません。海外で受けそうな感じではあるけれど、その受け方が佐藤さん本人の意図とは違うところだったり、そういうリスクはあります。

金澤 私はあの顔の表現含めてとてもいいと思いますよ。過去作ではもっとはっきりしていましたが、ある種のエロティシズムの描写にかなり踏み込んでいるんですね。だから使う言語としてはびったりだと感じます。世界観も主張も、周りに埋没しない、独特の輝きを放っていました。

名和 工藤さん(P.17)の作品は、最終審査のプレゼンテーションでは、難しい言葉を使って説明されていましたね。内容としては素朴なことをやろうとしている印象なので、そこはもっと普通に話したら良かったのではないかと。ドローイングも綺麗で可愛かったんですが、難しく言うおうとしなくて良いというか。

岩淵 そうですね、作品と言葉との間で、距離があるなという印象です。まずは、とことん作品から始めることにこだわってもいいかも。

金澤 彼が明治時代以降の近代化の中で成熟できなかった日本人のセルフポートレートを描いていると聞いて、問題意識も表現もわかるんですが、そこが一緒になっておらず、どこか消化不良でチグハグな印象でした。

保坂 工藤さんは説明の中で「目眩」と「ロマン主義」という言葉を使っていましたが、確かにその言葉はどちらも繋がりはしますが、あの作品を見て「目眩」と結びつかない

と、そうは感じませんでした。しかもその目眩は「身体的な目眩」ではない、と説明から理解したので、この言葉と作品はどのように紐づいていくのかわからなかったです。工藤さんの作品は造形が面白くクオリティが非常に高かったけれど、説明がもったいなかったなと思いました。

岩淵 僕は花形さん(P.6)の作品は、スペキュラティブ・デザインので異彩を放っているなと思いました。実際に登場してくれたアクターの人も良かった(笑)。

名和 アクターの人、審査中本当に一言も何も言わなかったですね(笑)。

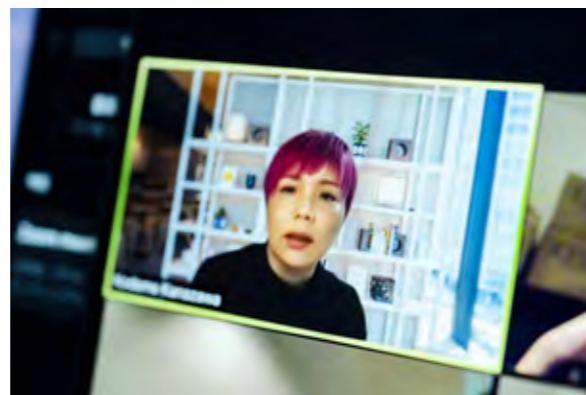
保坂 僕は作中にフェイクニュースを入れてきている点が気になりました。起きうることとしてやっているけれど、実際起きたことだけ見せるでも良かったのではと。

岩淵 そうですね。実践も積み重ねていくと、思いもよらないハプニングが突如起きたりしますよね。その現実社会との軌轢を可視化するところまでやると、そこから社会の問題も逆照射されてくるように思いました。

金澤 長谷川愛さんの作品の、レズビアンカップルの双方の遺伝子を持つ子供を作ったらどうなるのか、という作品を思い出しました。やってみたらどうなるのではとか、それは想像上のことでしかないのだけれど、それを見せることによって社会に訴えかけをしているのです。花形さんも同じ方向の表現をしていて、私はキツめのジョーク的表現として捉え、面白く思いました。

保坂 仮想であってもあれだけ事件が起きるのであれば、サービスのには何か是正をした方がいいのではとも思いました。あそこまで仮定で進歩し是正していれば、ああ言った見せ方にはならないのではという気もするんです。

名和 プロダクトデザイン的な作品の見せ方ですね。このガジェットがあるかどうかという問題が起きるかもしれない、というよ



うな。メディアアートの新しい出方というか。

岩淵 視覚的なプレゼンテーションは美術のプロパーたちから見るとずれているように見えるけれど、逆にプロパーではない人たちの方が、思い切ったアイデアの新しい見せ方も開発できるように思いました。

金澤 その話の流れでいくと、スブツニ子!さんも美術のプロパーからすれば、ずれている作家ですね。でもそういう表現の領域も、現代美術ではだんだん王道になりつつあるのではと思うんです。

保坂 栗原さん(P.18)は前回の作品審査の方が、音のインパクトがあって良かったですね。

岩淵 リズムというコンセプトは面白いのですが、肝心の音響的な魅力が少し弱かったように思います。展示環境の

限界もあったのかもしれませんが。

保坂 会場の都合も要因としてあったとは思いますが、スピードが遅かったり、高さがなかったり、作品審査では鉄管で組んでいたからカッチリしていたけど、今回はテグスのたわみがお祭りの飾りようになってしまっていて、カッコよさがなくなってしまっていました。最後、一個だけある「ポコン」という音がオチみたいになってしまっていたのも気になりました。

名和 アルゴリズムやプログラムの使い方も初歩的な感じで、広がりや想像することができなかったですね。GILLOCHINDOX☆GILLOCHINDAEさん(P.21)の作品も、作品審査からこの最終審査に来て、ちょっと違うかもなと感じてしまいました。写真で見た方がインパクトがありました。

金澤 私は作品審査までオンラインでの審査だったので、最終審査で実物を初めて見て魅力的な作品だと思いました。彼は日本画出身で、この作品の中に麻紙も使っていると説明を受け、それが印象に残っています。まだ専攻に対して気を遣っているのが学生らしいなと…。実際学校を出てしまえば、何をしようとか関係なくなりますからね。ともあれ、彼の今回の作品は第0章と聞きましたが、最後の章まで発表したその時に、初めて評価ができるのかなと思いました。

名和 彼の作品は写真の方が強い感じはしました。栗原さんの作品も同じことが言えますが、実際に空間表現をした時に体感で受ける強さみたいなものが、まだまだ足りないと思いました。

保坂 そうですね、少なくともヒルサイドフォーラムの明るい雰囲気にはあっていなかったです。GILLOCHINDOX☆GILLOCHINDAEさんが少し前に同じ作品を展示したという、北千住にあるBUoYのスペースだったら、確かに雰囲気はあっているけれど、それは逆にいうと他律的ということで

もあります。作品審査の時はスペースの問題もあって、作品をギュッとインストールしてもらったことから、作品自体に密度があって面白かったですが、今回の展示ではそれが単に引き延ばされただけというのも懸念ではあります。

名和 羽田野さん(P.10)の作品はとてもアカデミックで、彫刻について真正面から向き合いながら、それをユニークな形で解釈し直そうという姿勢が見られました。

保坂 審査中に彼も言っていましたけど、今回の展示の中では「写真」が一番良い作品でした。彫刻にむしろ使役されている人間のように見えると言うか、彫刻を作るということのはそういうことなのかなと理解できるし、彫刻が折れてしまうこと、完全な形を損なっていくことが彫刻を作ることなんだとか、あの写真一枚でわかりました。一方、展示の中の映像は違う問題に捕らえられてしまう可能性がありました。広告みたいに捉えられてしまうような。

名和 そうですね、彫刻と写真だけでも良かったですね。僕は彼の作品を見て、東京藝術大学彫刻専攻の教育方針の変わり目のようなものを感じました。教授が入れ替わっていることもあると思いますが、この10年くらいが脱近代のようなものが増えました。20年前の卒展ではほとんどが木彫や石彫で人体像を作るという雰囲気だったので、変化が続いているのだなと思いました。

金澤 彫刻にどう向き合うか、ということでは頑張っていたんだなと思いました。ただ一般的に現代の表現として見たときには、石鯨の彫像は等身大だったらどうだったのかとか、パフォーマーのパリエーションはこれがベストだったのかとか、思うところがありますよね。伸びしろを感じるので、発展させていって欲しいですね。

—— 審査員のみなさま、ありがとうございました。



CAF賞 2021 入選作品展覧会

2021年11月24日(水)～11月28日(日) 11:00-19:00
代官山ヒルサイドフォーラムF棟 ヒルサイドフォーラム

稲田 和巳 筑波大学大学院

乾 真裕子 東京藝術大学大学院

オウ ギョウユウ 多摩美術大学大学院

大里 淳 東京藝術大学大学院

工藤 時生 武蔵野美術大学大学院

栞原 幹治 東京藝術大学大学院

佐藤 菜々栄 多摩美術大学大学院

白川 真吏 多摩美術大学

羽田野 皓紳 東京藝術大学大学院

花形 慎 多摩美術大学大学院

藤生 恭平 東京藝術大学大学院

GILLOCHINDOX ☆ GILLOCHINDAE 多摩美術大学

主催 | 公益財団法人 現代芸術振興財団

会場設営 | FIGURE 17-15 cas

グラフィックデザイン | Dynamite Brothers Syndicate

会場写真 | 木奥 恵三

ポートレート、審査写真 | 西田 香織

公益財団法人 現代芸術振興財団

TEL 03-6441-3264

E-mail contact@gendai-art.org

